

平成 30・31 年度市町村立美術館活性化事業 第 19 回共同巡回展

「府中市美術館所蔵 ゆかいな創作版画展」(仮称)

〈企画について〉

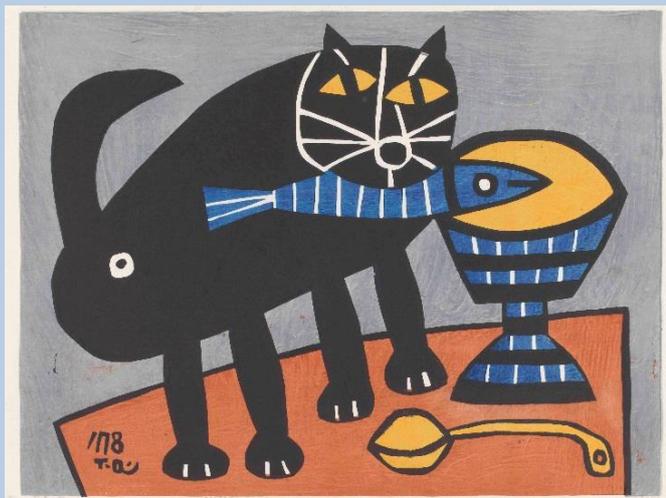
描いたイメージを自分で版に彫り、自分で紙に摺(す)った木版画作品が創作版画と呼ばれます。これは1904(明治37)年、雑誌『明星』に掲載された山本鼎《漁師》に始まったとされます。明治末から美術雑誌『白樺』などで西洋近代版画が凄まじい勢いで紹介されて、いよいよ版画熱が高まりました。絵師、彫師、摺師の分業による精緻な伝統的浮世絵系木版画も新版画と呼ばれ、創作版画はこれと競走しながら、様々な作品が多く画家たちによって作られてきました。

府中市美術館は、広範な創作版画運動のうち、特に「ゆかいな」創作版画作品に着目し、収集を行い、これまで4回にわたって展覧会を開催してきました。主な収蔵作家としては、川上澄生、恩地孝四郎、谷中安規、前川千帆、関野準一郎、浅野竹二などです。版画自体が複数枚作品であり、比較的安価な大衆の美術であることや、版画特有のイメージの簡素化とデフォルメの強調によって、より親しみやすい作品である上に、学校美術での実技、木版画年賀状の普及などによって、創作版画は卑近とも言えるほど、最も身近な美術作品となっています。

ただし、優れた創作版画は決して趣味的ではなく、イメージを純化させ、文学的世界に共通し、詩画集の挿絵に本領の一端を覗かせ独特の表現世界を形成しています。多岐にわたる創作版画のうち、着想の豊かさ、柔らかさ、力強さに妙味を発揮する自由なイメージ世界である「ゆかいな創作版画」作品たちが含む「おかしみ」こそ、日本近代美術の一つの大切な縦軸とも考え、府中市美術館のコレクションは形成されました。

平塚運一を始めとした創作版画運動は、全国に展開し、各地に指導者と版画集と教室が生まれ、かつての生徒が指導者となり今日まで活動が続いています。この展覧会をきっかけに、地域の創作版画家の作品も追加することで、地元作家の顕彰の場としていただき、さらにその作品によって地域に憩いと笑いが生まれることが期待されます。

創作版画のおかしみ



浅田竹二 《食卓の猫》1978年

府中市美術館では、浅野竹二さんの全国の名所絵を含む創作版画を120点ほど所蔵しています。この素晴らしい作家は関西ではよく知られていても、関東では未紹介でいわば無名でした。まだまだ優れた作家が全国におられるのではないのでしょうか。

美術作品に描くべきものとは、通常は「美しいもの」といえますが、ところが左図の《食卓の猫》ではどうでしょう。人間の食卓上に四つ足で上がり、まんまと魚を一匹頂戴し、しめしめと振り返ると、なんとそこには現場の目撃者となった我々(鑑賞者)と目があって気まずい、といった様子がよく分かります。私たちがこの猫に声をかけるとしたらどうでしょうか?「泥棒猫!」と怒るのか、「お前、今、ものすごくびっくりしているでしょう。右と左の目がずれちゃってるよ。」と笑うのか。二つの人格のどちらを選ぶのか、人間に潜む二面性を作家は鋭く問いかけているような気がします。このように、創作版画には、見るものが勝手なセリフを自由につけることができます。この自由気ままな感性遊びこそ、鑑賞の基本であるべきではないでしょうか。(府中市美術館 学芸係長 志賀秀孝氏)

〈開催時期〉 平成 31 年度(平成 30 年度は準備年に当たります)

〈事業主体〉 第 19 回共同巡回展実行委員会(参加決定後、平成 30 年度に全参加館により組織します)

〈助成〉 一般財団法人 地域創造(準備年、開催年の2か年にわたり助成します)